

-----自己アイデンティティの形成過程-----

学籍番号 12032069
氏名 高瀬祥央
指導教員名 立木茂雄

1章 序論	1
1.1 はじめに	
1.2 テーマ選択の理由と背景	
2章 E・Hエリクソン『青年と危機』より	2
2.1 生活周期とアイデンティティ	
2.2 パーソナリティの発達段階	
2.3 訪れる葛藤	
(1) 乳児期「信頼と不安」	
(2) 早期児童期「自律性と恥・疑惑」	
(3) 遊戯期「積極性と罪悪感」	
(4) 学齢期「勤勉性と劣等性」	
(5) 青年期「アイデンティティとアイデンティティの混乱」	
(6) 初期成人期「親密性と孤立」	
(7) 成人期「生産性と停滞」	
(8) 成熟期「統合性と絶望」	
3章 実際の経験に基づいての振り返り	8
3.1 家族からの影響	
(1) 家族の構成員と自身への影響	
(2) 家族間での出来事 その1	
(3) 家族間での出来事 その2	
3.2 大学入学までの出来事	
(1) 部活動	
(2) 自発的行為	
(3) 大学入学までの道のり	
3.3 就職活動期	
4章 これまでを振り返って・結論	19
参考文献リスト	21

1 章 序論

1.1 はじめに

今回、私は「自己アイデンティティの形成過程」というテーマについて論じていく。ここでは、序論として私がこのテーマを選択した背景や理由、結論に至るまでの全体の流れを紹介していく。

1.2 テーマ選択の理由と背景

私が今回この自己に関するテーマを選んだのには、理由がある。私は、2005年の後期から2006年の中期まで就職活動を行っていた。私は、これを「自分自身を見直す機会」だととらえ始めたのがそもそもの発端であり、きっかけである。

就職活動には、相手企業に自分がどのような人間であるかを伝えること、つまり面接が手段としてある。自分がどんな人間であるか、それを少しでも知るために、自己分析を行うことが現在の就職活動における第一歩である。一言で、「自己分析」といっても抽象的過ぎてよくわからない。私はこう解釈した。要するに、自分の過去の棚卸し総決算みたいなものだ。その際に、自分の性格、所属集団での役割、家族のなかでの役割など、直接面接には関係が薄いと思われることまで深く考える機会となった。これまで私自身が意識してこなかった、考えてこなかった「自分」という存在がいろいろな局面を思い出すことによって、どんどん浮き彫りになっていく、そんな作業だった。なので、私の就職活動は、単に、どこでもいいので興味のある企業から内定をもらうことがゴールではなかった。内定のその先にあるものが知りたかった。つまり、自分がいかにしてその企業に行こうとした決断までの過程がもっとも大事であり、今までの自分自身の人生においても、徹底的に考え抜いた結果であるといえるということが、私自身の就職活動の執着地点であった。かといって、自己分析がここで終わりかといえばそうでもない。自己分析は一生続くものであると私は考えている。

ここでは、今までの自分自身という存在を振り返り、どのようなものや、どんな人に影響され、現在に至っているのかということは今一度整理し、就職活動の振り返りという意味も込めて、自分理解を深めようと思っている。また、それには当然、家族との関係性も深く関連しており、今までの華族の中での自分の行動、考えについても言及していきたい。というのも、後ほど詳しく述べていこうと思うが、私の家族構成は少し特殊であり、私だ

けが親、兄弟とすごく年齢が離れている。その点において、家族の中での私の存在、幼少の経験も私のアイデンティティに深く関連しているといえるからである。

私は、来年社会に出るに当たってのこのタイミングに、学生時代の集大成として、自分の過去を知り、それを考える就職活動は自分にとってどのような意味があったのか、その過程はどのようなものであったかを振り返ろうと思う。

また「社会学的自己論」という観点があることを知った点も大きく関連している。

以上が、このテーマを選んだ理由と、簡単な背景である。

2 章 E・Hエリクソン『青年と危機』より

2.1 生活周期とアイデンティティ

私は、自己を知るための論を展開していくにあたり、E・Hエリクソンの『青年と危機』を使用する。この著の、「生活周期」という概念に注目した。

「生活周期」とは、アイデンティティの不可欠な構成要因である。それは、個人は青年期になってはじめて、「アイデンティティの危機」を経験し克服するという前提条件を、身体的成長、精神的成熟、社会的責任感などの点で、発達させることが出来るようになるからとされている。そのため、「アイデンティティの危機」は、青年であることの心理社会的な側面のことである。また、そのアイデンティティが、その後の人生を決定的に規定するような形態をとることができなければ、青年期を通過することはできないとされている。つまり、「アイデンティティの危機」があるからこそその青年期であるといえよう。

E・Hエリクソンは、内的・外的な葛藤という観点から、人間の成長をとらえている。活力的なパーソナリティは、葛藤を乗り越え、危機を克服するたびに、内的統一生感の増大、善き判断の増大、また、自分自身の基準や、自分にとって重要な意味を持つ人々の基準からみて、うまくやる能力の増大をもたらすのである。つまり克服するたびに、自分の精神にとってプラスなものが加わっていくという感覚であろう。

ここで、エリクソンは、健全なパーソナリティを構成するものがなんであるかについてM・ジャホダの定義を取り上げている。その定義は、健全なパーソナリティとは、環境を積極的に支配し、パーソナリティの統一性を示し、世界と自分自身とを正確に認識しうるようなものであるとしている。これは、全ての判断基準は、子どもの認知的、社会的発達と関連したものである。それは、児童期がそれらは最初存在しないものの、複雑な段階を

経て、乗り越えることによって、徐々に発達していくものと定義できるからである。

では、活力的なパーソナリティはどのように成長するのか。そして、人生の必然性に適応する能力、しかも活力的な熱意を伴った能力の増大という連続的段階からどのように発生するのか。それは、次の通りである。つまり、成長するものは全て「基礎計画」を持っており、ここから諸部分が発生し、その各部分には、それぞれの部分ごとの特殊な優勢時期があり、全ての部分がひとつの機能的統一体を形づくるにいたるまで続くのである。内的葛藤は、個人が明確なパーソナリティを持つにいたる際の構成要因である。

健全な子どもは、適度な指導を適度に与えてさえいれば、発達の内的な法則に従うものだと考えてよい。内的な法則とは、自分に注意を払ってくれ、応えてくれるような人々との有意義な相互作用や、自分を迎え入れる準備が出来ている諸制度との有意義な相互作用を可能にするような、潜在的能力を創り出すものである。したがって、パーソナリティとは、人間のある準備状態の中ですでに予定されている段階にしたがって発達するものであるといえる。

2.2 パーソナリティの発達段階

パーソナリティの発達における段階を提示するために以下の図表を用いる。この図表は一連の段階と、構成諸部分の漸次的発達とを意味している。つまり、諸部分の時間的な連続的分化を定式化したものである。

1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	8段階
							統合性 対 絶望
						生産性 対 停滞	
					親密性 対 孤立		
				アイデンティティ 対 アイデンティティの混乱			
			勤勉 対 劣等感				
		積極性 対 罪悪感					
	自律性 対 恥・疑惑						
信頼 対 不信							

これらは、次の二点を示している。第一に、活力的なパーソナリティの項目は、他の全

ての項目に体系的に関連しており、また、全ての項目は各項目の連続的発達に依存している。第二に、各項目はその決定的かつ危機的な瞬間が到来する以前に、何らかの形をとって存在している。上記の図のとおり、「信頼」が人生において発達すべき精神的活力の第一の構成要因だとするなら、「自律性」が第二、「自発性」が第三の構成要因といった具合である。つまり、この図表は、構成要因、そしてそれぞれに対応する少数の事実との間に存在するいくつかの基本的な関係を表現しているのである。そしてそれぞれは、優越的位置に到達し、危機に遭遇し、そして各段階の目標に向かって解決策を見出すのである。人間の人生には、このような段階を経てパーソナリティを成長させる、いわば試練のプログラムのようなものがあつたといってもいいのかもしれない。

次に、各項目について整理していきたい。E・H エリクソンは人間の発達段階をこのような8つに分け、ある段階から次の段階に移るとき、個体と環境との関係から要請される発達課題を達成できるかどうかの緊張状態を「アイデンティティの危機」としている。また、危機的というのは人生における転機である特徴で、前進か退行か、統合か遅滞かを決定する瞬間である。

ここで注意したいことがある。これらの各段階の対立は、「乗り越えた」といっても乗り越える際のプロセス・アプローチは個人個人で異なり、まったくその後のアイデンティティ形成に影を落とさないものではないというように考えられる。なぜなら、これらを順序よく完全に乗り越えた人間を「完全体」と表現するなら、不信、恥、罪悪感などをもたないということになる。そうではなくて、生きていく上ではさまざまな外的影響や出来事が、自分自身に降りかかってくるものである。そのたびに苦しみ、悩み、考える。そのときに負の感情、すなわち各段階で得られるもの、乗り越えねばならぬものの対極にある感情とどう向き合うかということも重要になってくるだろう。ここで誤解してはいけないことは、それらの負の感情に襲われそうになった時、個人がいかに乗り切るかということだ。どのように打ち勝ち、自分という存在を作り上げていくかである。全員が全員、同じバランスで育つということはない。その点を誤解してはいけない。

2.3 訪れる葛藤

(1) 乳児期「信頼と不信」

幼児期における「基本的信頼」とは、自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚、ならびに、他人も本質的に信頼してよいものだという感覚である。母子関係におい

て、乳児が基本的不信をうわまわる基本的信頼を確立できるかということである。

(2) 早期児童期「自律性と恥・疑惑」

次に、早期児童期における「自律性」とは、排泄のしつけを通じて、幼児が保持することと解き放つことを協調させ、自律的な意志を身につけることができるかである。

(3) 遊戯期「積極性と罪悪感」

児童期における「積極性」とは、「エディプス・コンプレックス」による罪悪感を乗り越え、自発性・積極性を身につけられるかどうかという点である。「エディプス・コンプレックス」とは、自分にとって異性の親を求め、同姓の親の死を願うという抑圧された願望のことを示す語である。「積極性」とは「自発性」でもあり、自分から物事を進んでしようとする、あるいは、他からの影響や強制などではなく、自分の内的要求によって行われる行為である。もちろん、やりたい放題させるわけにはいかないが、あまりに否定しすぎると、つまり、出る杭を打ちすぎると、「罪悪感」を生みかねない。この段階のもたらす、病理的な帰結は、すなわち罪悪感はずっと後になってから姿を現すということである。そして、「罪悪感」における拒否や自己拘束ゆえに、内的能力や想像力、感受性にしたがって生きることができにくくなる、または、できなくなるのである。これはあくまで極端な話だとは思いますが、少なくとも「罪悪感」を生み出すことは自己に多大な影響を与えかねないだろう。

(4) 学齢期「勤勉性と劣等感」

次の段階は、学童期における「勤勉性」である。この時期になってくると、遅かれ早かれ、何かものをつくる、上手に完全に作ることができるという感覚なしでは満足は得られないようになってくる。それこそ、「勤勉性」である。一般には、何かに一所懸命、精を出して励むことであり、その対象は主に仕事や勉強などである。ここでいう「勤勉性」とはその行為そのものを示すものであって、行為の結果を示すものではない。そういった結果にとらわれると、自分自身の社会的評価であったりするものを気にするあまり「劣等感」に襲われかねない。この段階は、社会的には最も決定的な段階である。「勤勉性」とは、他人とは別に、しかし他人と一緒にこなすという共同作業の要素が含まれている。分業の機会や分化についての最初の感覚が、この段階になって発達するのである。自分には能力

があるということを支持することによって生産性が身についていくのである。能力がある、すなわち有能であるということは、重要な課題の達成において、知性を自由に使うことのできる能力であり、「劣等感」によって損傷されていない能力のことである。これこそ、生産的な成人としての生活への強制的な参加にとって基礎となる部分である。

(5) 青年期「アイデンティティとアイデンティティの混乱」

ここで、私の論にとって最も重要であると思われる青年期の登場である。学校生活の後半になると、生理的な変化や、大人としての役割への不安などによって悩むことの多い青年は、事実上はじめて「アイデンティティを形成しよう」という試みに出る。自分が思う自分の姿より、他人の眼にうつった自分の姿のほうに関心があるのである。つまり、自分は相手にとってどのように見られているのだろうかという感覚である。また、それらを研究する際に、何人かの青年は、理想像を最終的なアイデンティティの保護者として設定する前に、かつて経験してきたもろもろの危機をもう一度しっかりと支配しなければならない。つまりここでもう一度整理する必要があるということを示している。今までは児童期にその原因を求めていたのだが、この青年期の人間が必要とするものは、アイデンティティの様々な構成要因を統合するための猶予期間、すなわち、「モラトリアム」である。骨をおって何かしたい、何かを上手にやりたいという願望が、学生時代に獲得されるとするならば、職業の選択は、給料と地位という問題を越えた重要性を帯びてくる。

青年の心を激しく動揺させるのは、職業アイデンティティに安住することができないという無力感である。青年は、集団を維持するために、派閥や仲間の英雄と自分とを過剰なくらい、個性を喪失してしまうのではないかと思うくらいに同一視する。恋愛にも、同じようなことがいえる。青年期の恋愛は、拡散、混乱した自己像を、恋人に投射することにより、それが反射され、明確になるのを見ることによって、自分のアイデンティティを定義づけようという試みなのである。このために、青年期の恋愛は大半が会話なのにも納得がいく。

その点を明確にする課題は、破壊的な手段によっても追求される。青年は、他人を除外する点において、党派的で不寛容で残酷になりやすい。他人というのは、身体的特徴、文化的背景、好み、才能、洋服、しぐさのつまらない特徴という点で異なる人々である。それはアイデンティティの喪失感から身を守るためのものではあることを理解しておく必要がある。そのすべての排他的行為が許されるものではないにせよ、青年期においていわば

自分を肯定する、安心させる不可避的な行為なのである。

また、肉体の一部が急激に成長したり、思春期に肉体や想像力がさまざまな衝動によって満ち溢れている時、異性と親しくする時、あまりに多くの相対する選択肢に直面した時、直接的に将来の選択肢に直面した時、青年は、そのような不安を感じる間は、派閥を作ったり、自分達の理想や、もしくは敵をステレオタイプ化することによって、互いが忠誠心を持ち続ける能力を持っているか、試験しあっているのだ。青年期は、今までの自分を一度整理し、アイデンティティを探る期間といえるだろう。

(6) 初期成人期「親密性と孤立」

青年期を超えると、「アイデンティティの彼方」、つまり、自覚力と意志力という洞察的中心が存在するのである。

最初に訪れるのは、「親密性」の危機である。真の「親密性」は、これまでにアイデンティティが申し分ない形で形成途上にあることが条件である。他人と親密な関係を樹立していない場合には、ステレオタイプな対人関係で満足してしまう。それは深い「孤独感」を味わうかもしれない。「親密性」と対を成すものは「疎遠性」「孤独感」なのである。自己の本質にとって危険な存在を、否認し、孤立させる用意のことである。それは、自己の「親密性」の領域を要塞化し、外部の人間全てを偏見で見ることになる。しかし、成人としての責任の領域が明確になり、競争的な出会いや、愛情の絆や、残酷な敵意が分化していくにつれて、やわらぐにつれて、個人は倫理感に従うようになってくる。成人としての象徴である。

また、「親密性」には性的なものも含まれており、異性二人の性的な差異がはっきりしてくるにつれて、確立された活力的な力強さゆえに、意識、言語、倫理の点において、初めて類似した存在になり、お互いを率直に認め合うものとなる。性的な魅力以外にも、「愛」も発達させ、共有された新たなアイデンティティを求める欲求に奉仕するものである。「愛」とは、競争と協力、生産と出産などの相互の連携をひとつの生活様式の中に結束させるようなものである。このような点において、ここに来てアイデンティティは、「私とは」から「我々とは」という形に変化するといえよう。

(7) 成人期「生産性と停滞」

次の段階として「生産性」とあるが、自分の次の代を育てる、次の世代に教授するとい

う作業に積極的に関与し、喜びを感じることが出来るかという意のものである。この「生産性」を持つには、自分自身がしっかりと確立されていなければならないという側面があるだろう。ここにいたるまでに、ある程度自分を確立していない、または深みを持たない場合、それを次の世代に託せないということになってしまう。その意味での「停滞」なのである。

(8) 成熟期「統合性と絶望」

最後の段階は、成熟期における「統合性」である。秩序と意味を求める己の傾向に関して、自我が結果的に抱く確信である。経験してきた過去そのものに忠実であり、現在においては指導的役割に着く準備が出来ており、やがてはその立場をも譲渡する用意が出来ている感情的な統合体のことを表している。自己にとって一回きりの生活周期を受け入れ、当然そうならなくてはならなかったし、必然的なものとして自分にとって重要な存在となった他者を受け入れるものである。

またそれは、自分の人生は、自分自身の責任であると受け入れる「愛」である。人間的な「尊厳」と「愛」とを異なった時代の異なった経験をした人々の間に感じる仲間意識である。こういった観念を、ここでは「完全性」と表現する。そのような「完全性」を持った人々は、個人の人生とは、ただ一度の生活周期と歴史の一部分との間のまったく偶然の一致から成り立つことを理解している。

結果的に得られた自我の統合体を欠如しているものであるかどうかは、「絶望」の存否によって示される。それは、運命を人生の枠として受け入れることが出来ず、時は短く、別の人生をやり直すことも出来ないというような、いかんともしがたい感情の表現である。これが超絶的な生命を求めるビジョンと結びつかない場合は、単に自己に対する軽蔑を意味しているものである。

ここまでの結論としては、心理社会的な力というものは、個人の生活周期、世代の継起、社会構造の三つを同時に統御する過程に依存している。なぜならそれら三つは一緒に発展してきたものだからであるといえよう。

3 章 実際の経験に基づいての振り返り

3.1 家族からの影響

(1) 家族の構成員と自身への影響

ここでまず、私の家族関係について詳しく述べていこうと思う。というのも、家族の構成員が私のアイデンティティに与えた影響は大きいと考えられるからである。

私の家族の構成員は、父 70 歳、母 65 歳、長女 42 歳、長男 38 歳、次女 38 歳、そして次男である私 23 歳の合計 6 人である。見ての通り、他の兄弟と私はかなり年齢差があることがわかる。そして、父とは母もう高齢とっていい年齢に達している。余談ではあるが、私の「祥央」という名前は、兄弟がつけてくれた名であり、「幸せの真ん中をいく」という意味を含んでいる。こういう点でも、兄弟に名前をつけてもらったというのは珍しいパターンではないだろうか。

さて家族構成が私に与えた影響という点においては、細かい事象を上げていっても、きりがなくなるので、年齢差があることによってどういった影響があったかにここでは絞ることにする。

私自身は、この家族構成についてどうこう思ったことはない。特に嫌だった思いも一度もしていない。この家族構成の特徴は、私の視点から見ると、私以外、全員大人であったということである。このことは私にかなり影響を与えたといえる。それは、年上の人と、特に成人している大人と話すことが全く緊張せずに行えるという点にある。一方で、私は年下相手にコミュニケーションを取ることを大変苦手としている。このような点においても、この家族構成が私に与える影響は大きかったといえる。

(2) 家族間での出来事 その 1

また家族の特徴として、家族間でトラブルが発生すると私は子どもだということで、私以外の家族構成員で話し合いがもたれた場面が見受けられた。それは、私の意見はそこには全くないと言ってもいいだろう。

例えば、小学校も高学年になったとき、両親が喧嘩したことがあった。それで、耐えかねた母は家を出た。原因は父がいつものようにお酒を飲み、文句を言い出したからである。父はよく酒を飲んで、文句ばかり言っていた。そのときも原因は父の一方的な母に対する文句である。母も、言い返せば暴力に発展しかねないことを知っていたので、今まで耐えていたのだが、さすがにその時は、耐えかねるものであったようだ。実際、私も母に暴力を振るう父を何回か目の当たりにしている。母はいつも私に、余計なことは言わないようにと釘を刺されていたので、何も言えなかった。またそのときは運悪く他の兄弟は出か

けており、いつも仲裁に入る兄が不在であった。私は次の日も平日で学校だったため、小学校の道具を最低限持ち、軽装で母とともに夜中に出かけ、4 駅ほどいったところにある母の妹の家に行った。私は、何日か母の妹の家から学校に通うつもりだったが、距離のこともあり、私は、実家の向かいの家に寝泊りすることになった。向かいの家には同い年くらいの女の子がいたし、その子の母親は姉の下の学年で互いの家族間の親交が深かったためである。もちろん、私が向かいの家にいることは父には内緒である。私を除く他の兄弟と父は実家、私は実家の向かいの家、母は妹の家で暮らした。期間にして2週間程度である。

家では兄、姉二人と父の間で何らかの話し合いがもたれていた。兄弟は、ちちのそういった横暴な態度に対しては、母寄りの立場で物事を判断していたことは当時の私から見ても、普段のやり取りから推測しても明白であった。そして、私を預けたのは、その話し合いとは無縁のところにいることで負担や不安を持たせないという隠れた意図があった。それに私は他の兄弟がいるので、こういった問題に関しては全て任せていた。というのも、小学生の私には聞かせたくない話や、父の態度を見せたくないという兄弟の配慮があったことは当時の私にはわかっていた。自分の意見としては、家族が安泰であることが一番であるし、早くもとに戻ればいいのにと思いながら過ごしていた。しかし、自分の意見は一度も言わなかった。母には母の思うところがあるだろうし、実際私は父が世の中で一番苦手であったからだ。おそれていた。暴力を振るわれるのではないか、大きな声で怒鳴られるのではないか。不安だった。こういった理由で、私は自己主張を全くしない子どもであったし、欲しい物があっても遠まわしにわがまを極力言わないように配慮していた。また、父の前では自分を埋没させ、おとなしくしていることが、私のトラブル回避の手段であった。そのため、物心ついてからは、例えば今日あったことの報告や、自分の好きなこと、進路についてなど、自分のことをひとつも話すこともなく、相談相手でもなかったのである。単に恐れていたのだ。それに、自分の話を聞いてもらえとも思っていなかった。そのため、私は年配の男の人と話すことが苦手であったし、父を「悪い見本」として「反面教師」として認識するようになった。母にもそのように言われたのも影響している。何度か母から父の愚痴を聞いていたし、その影響もあって、家族の中の認識として、父をその「家族内の悪」のポジションに位置づけしていたと思う。この排他的行為はもちろん健全な行為とは言いがたいが、そうすることで自分自身を恐怖から守れるならそうするほかなかった。

このような出来事があると、私以外の兄弟が恐怖に対してのクッションになって、私を守ってくれていたと思うと感謝ではある。しかし同時に、その場、つまり家族内には私の意見はなく、兄弟に従うしかなかったのもそのころの現状であった。それは私のアイデンティティに深く影響を与えていた。人に自分の意見をストレートに言うことが困難だったのである。

(2) 家族間での出来事 その2

そのあと、少しして母が肺がんになり入院と手術をすることになった。当時、私は、病名など聞かされていなかったし、病状がどの程度のものなのかということがよくわかっていなかった。ここでも兄弟がフィルターになっていたのである。母が入院し、家にいなくなっても、姉は勤め先の市役所から6時過ぎに帰宅するし、昼間誰もいないというだけで、特に問題はなかった。向かいの家にも何度かお世話になったし、以前経験しているので普通のことのように思っていた。また、このようなイレギュラーな出来事があると、家族間での揉め事もなく、家族のベクトルがひとつの方向に向いていたように思うし、兄は父に物言いをする人だったので、父もその意見を取り入れたりしていた。何より母が心配であった。またも、他の兄弟が私を面倒見てくれるというライフスタイルに変わり、私は意見を言う間もなく、母もよくなり退院することになる。

今回もすべての家族間での出来事が自分以外のところで進んだのも事実であり、私はそれに任せっきりで、家族間に私の意見はなかった。兄弟から言われることは、もう決定済みのことであつたし、私はそれを受け入れるしかなかった。この出来事があつてから、父は全体的にやや優しくなったように思うが、他の家族からの扱いとしては以前となんら変わりなく、一部分では排他的であり、その「日常」に戻っていった。

3.2 大学入学までの出来事

(1) 部活動

これまで自発的にものごとを進めていった経験がなかった私は、中学入学後、弓道部に所属した。何かスポーツをしたいということもあつたし、本当はサッカーがしたかったのだけれども、部活動として存在しなかったので弓道部に入った。中学2年中期より、部長を任されていたのだが、これまで年下との付き合いがなかった私は、敬語を使われたところで、どのように接するべきか、よく理解できなかつた。そのため、私は同学年の友人と

同じように接した。しかし、これが失敗の原因であった。つまり、私はリーダーシップというものをまったく発揮できなかったということである。しかし、部全体が荒廃し、無秩序になったわけではない。やるべきメニューはこなしていた。しかし、メリハリがなかった。他人に注意するという行為、それ自体がそのころはまだ億劫であったし、急に実践したところで、空回りである。一度、場の空気がゆるくなってしまうと、なかなか引き締めることは困難である。その後、部活動においては、高校に入っても、弓道を続けたのであるが、仕切り役、キャプテンを務めることを私は拒んだ。先生に、「お前しかいない」と言われても、認められた事実は喜ばしいものであったが、高校となると今まで作り上げてきたものを私が再び壊してしまうのではないかという思いもあった。そして、もっと高い意識でやっている人に対して失礼であると考えた。私は、部活動もそこそこに、もっと楽しめるものを自分自身で見つけ出してしまっていたのである。

(2) 自発的行動

私は、高校二年生のときに、中学のころからの友人と駅前と公園で路上ライブを始めた。なにより満足だったのは、自分で本当にやりたいと思ったことを、誰からの強制でもなく、押し付けでもなく、自分の意思で始めたという満足感があった。それは、楽曲のクオリティーとかそれ以前の、自分たちのモチベーションの問題であった。ただ、当時は、演奏はすればするほど楽しく、上達していったし、自由という名のもとに、好きにできていた。同じようにやっている人はほとんど年上で、自分たちよりスキルもあった。そういう人たちとの交流もあったし、何より度胸がついた。というよりは、そのときなりに精一杯やっていたし、才能があるとかないとかそんなことはどうでもよかった。自己満足気味だった私たちのライブは月二回ペースで行われていき、受験シーズンが到来するまで約1年半行われた。

(3) 大学入学までの道のり

高校三年生、大学受験のシーズン到来である。今まであまり熱心に勉強してこなかったので、現役での受験にはよい結果は得られなかった。このとき、私はまだまだやり残したことがあると思い、それを後の一年間ですべてやろうという自発的な思いから予備校に一年間通うことにした。落ちたことにはすごくショックであったが、当然といえば当然という形ですぐに受け入れることができ、春からは自分のやれることはすべてやってから次に

備えようという気分でいっぱいであった。この一年間は、本当に誰に強制されることなく自由に勉強に取り組むことができた。やるべきことはやった。そして、合格した。大学の選択については、何を学びたいとか、この大学にはこういう施設が、という選び方ではなく、自宅から無理なく通えるところという点において、当大学を志望していた。それは金銭の面でこれ以上家に負担をかけたくないと思っていたからである。一年予備校に通うのも、負担をかけてしまっている。これ以上迷惑はかけられないなと思った上での選択だった。

3.3 就職活動期

私は、就職活動を始めるときに当たって、これといった目標は当初なかった。漠然と自分の興味のある仕事につけば、あとはなんとでもなる、なるようになると思っていた。社会というものに対し、漠然としたイメージであった。しかし、私は大学に入学してからずっとアルバイトをしていたため、働くとはどんなことであるかというイメージは出来ていた。その変な自身が逆に、あだとなって自分自身が働くということをあまり具体的に考えないでいた。考えがなければ、動けるはずもない。目標がないと、行き先がないと将来の方向がわからずに就職活動をしてしまう、まさに暗中模索状態である。しかし、最初からやりたいことを絞って就職活動をするスタイルより、自分自身のやりたいことを探しながら就職活動を行うスタイルが自分に向いているのではないかと考えた。これまでそこまで考えてこなかった自分の職業観について徐々に考え始めるようになった。むいていないのではなく、やりたいか、そこに自分はやりがいを感じる事が出来るのか、その点を中心に就職というものを考えていくことにした。というのも、私は、アルバイトでもその部分を大切にしていたからである。

アルバイトはレンタルビデオ店の接客業をしていた。街の中にはその店しかなく、在庫量も豊富で、割安だったために休日には多くのお客さんが来店するような規模の店舗であった。私は入った当初、自分のお金を自分で稼ぐ手段としてアルバイトをとらえていた。働いた分だけお金がもらえ、その分私生活の自由度が増すと考えていたからである。しかし、目的はひとつではなくなっていた。働くということが、ひとつの目的と化していたのである。働くことは楽しいと思った。しかし、仕事そのものだけがその要素だったわけではない。一緒に働く人々を尊敬していたからこそ、楽しいと感じることが出来た。楽しいと

いっても話相手がいるといった楽しさではない。一緒に意識高く働くということが楽しかった。私はその中で、人間としても少し成長できたように思う。視野が狭かった自分の世界を、アルバイトというものが広げてくれた、それくらい私の人生において重要な役割を示し、また、年上の先輩と仕事からプライベートなことまで話をする機会は、いままで人とそこまで真剣に自分をさらけ出して向き合ったことのなかった私を十分に刺激し、いろいろなことを吸収し、視野、考えを深めていく機会になった。また、私は次第に、お客さんのニーズに応えられた時に喜びを感じ、そしてそれをこちらから先に提供する工夫をし、自分のコーナー展開など、仕事そのものの幅も広げていけるようになっていった。私にとってアルバイトは、もはやお金を稼ぐ手段という概念はそれほど重要ではなくなっていった。働くこと、自分から工夫すること、相手の考えを読んで、先に行動すること、それらに楽しさを感じられるようになり、一緒に働くほかのスタッフとのやりとりのなかで自分の精神を高めていくことが目的になっていったのである。私はこれを成功だと思っている。もし、私がこのアルバイトを選んでいなければ、今のように以前より少しだけ自身を持っている自分は存在しないと言い切れる。私にとって人生のターニングポイントである。

こういった経緯があったからこそ、私は働くことの楽しさを少しだけ理解したような気であった。私は自分の将来像が不安定なこのとき、それが逆にチャンスだと感じていた。というのも、最初からやりたいことだけを目指して就職活動するのではなく、まだまだ世間知らずな私が、社会を知るよいきっかけになると考えたのである。知らないことを知るということは楽しいし、何より実用的な経験になると考えた。未知の仕事に触れることで、私自身の可能性を広げる結果になるかもしれない。そうプラス考えるとなんだか就職活動を楽しめる気さへしてきた。

しかし、ここまでたどり着くのにも私は苦勞した。やはり最初は暗中模索であり、楽しむといった考えは生まれなかった。毎日が不安で、自分の興味のある仕事を探すあまり、無理に興味を持とうとしていた傾向すらあった。また、やりたいこと興味があることだけでは、この企業に決めるという決断はできない。やはり、雰囲気、規模などの自分の中の条件もクリアするものを見つけ出さなくてはならない。世の中に膨大な数の企業が存在する。私は、そこに可能性を感じていた。しかし、自分自身がやりたいことだけやれる仕事なんて存在しないだろう。理想だけでなく、そういった現実面も考慮して選択しなければならない。だからこそ、就職活動は行動力がキーポイントになってくる。それが5割を占めるといっても過言ではない。家で不安を抱えながら就職活動ナビサイトを見て過ごすよ

り、実際に説明会に足を運んでみて雰囲気に触れることが何よりも重要であると私は感じた。不安を解消するには自ら動くこと、とある企業の社長がおっしゃっていた。まさしくそのとおりだと思う。説明会やセミナーに参加すれば、何かしら収穫はあるものである。

興味がかきかけとなれば、自分の張っているアンテナに少しでも引っかかれば興味ということになるものであろう。ただ、自分の体はひとつであり、そのため興味の取捨選択をしなければ自分のペースを守れないし、明らかに自分の許容範囲を超えてしまうことになる。完璧主義者ほど、この瞬間はイライラするものであろう。私は、エントリーシートの締め切りに追われるうちに、この取捨選択ができるようになっていった。諦めるのではなく、本当にいきたいと思うか今一度そこで自問自答する。行きたいという気持ちがあれば今すぐにでも書けるものである。気がないのに無理矢理志望動機をひねり出しても、後に気がなくなるのは目に見えている。このように就職活動は選択でもある。こうしなければならぬというマニュアルはない。個人によってアプローチの仕方、仕事選びの基準が異なるものである。

私の父、そして兄は理系出身である。理系出身者の場合、自分の専門が決まっているので、私のように足を使い、多くの取捨選択をしなくても内定が出たりするものである。そして、大体自分が名前の知らない企業だと、批判するものである。しかし、親としては当然かもしれない。子供には母体のしっかりしているところで働いてほしいと思うものであろう。私も、出かける前に行き先の企業名を母に告げてみたところ、知っている企業と知らない企業とでは明らかに反応が違っていた。それも正しいかもしれない。しかし、自分の目で見るとそれは100パーセントではない。就職活動をしているのは自分自身であり、親は自分ではない。やりたいことも異なるだろう。私より多くの現実を知っていることも事実であろう。しかし、最初から答えが用意されていると、私も行動しづらいものである。こんなにいろいろな企業を好きに見る機会なんてそうはないのだ。この機会から私は多くのことを学びたいと思うし、それが私なりの就職活動である。もちろんゴールは決められている。自分なりに納得のいく企業に就職することである。と、同時に、私にはもうひとつある。それは、納得のいく活動を行ったうえでの内定である。やり遂げることが重要だと感じた。たとえ、周りが就職活動を終えていこうとも、これだけは譲れないでいた。流されるわけにはいかない。私は手探りで就職活動を行っていくうちに、いつの間にか自分なりの就職活動が見えてきつつあった。何回も軌道を修正し、興味という円を徐々に絞りながら、現実も見、夢も描き、ふるいにかけ、そしてかけられながら就職活動は続

いていく。最初は非日常だった行為も日常に変わっていく。

初めての面接を迎えた。本命とまではいかないまでも、それなりに興味のある企業だった。真っ白になるとはこういうことだと思うくらい、投げかけられる質問に対し、私の返答は自信のもてる内容ではなかった。自分のことは自分が一番わかっているはずなのに、答えられない。これはどういうことだろうか。緊張もあるだろうが、何よりショックなのはこれで終わるということである。言いたいこと、自分の中身を出し切れないうまま終わる、自分はこんなものじゃないと思っていたのに、相手にはそれが伝わらず、無念の思いである。自分のことを端的に使えるのはとても難しい。自分はこういう人間です、と、ひとことで表せないことが多いからである。しかし、それが人間だと思う。自分にはいろいろな側面がある。私自身の場合、アルバイトのリーダーとしての自分、学生幹事である自分、4人兄弟の末っ子である自分など、である。場所によって役割が異なり、また、相手の中の自分は十人十色。20分少々面接で自分を出し切るなんてことは考えてみると不可能だ。なら、もちろんビジネスに向いているような点をアピールすればいいだけのこと。実はすごく単純なことだ。しかし、私はそれでは何か寂しいような気がした。すごく機械的になってしまうからだ。もちろん、そういうビジネスに関する面も必要だ。しかし、それでは得られるものは限られてしまうと考えた。私は、就職活動で今までの生活にないことを吸収していきたいと考えているからこそ、その点ではこのアピールだけでは満足できない。なら、どうすればいいのだろうか。模索しながらの面接は続いた。この模索は、もちろん就職活動としては模範的とはいえない。しかし、個人によって活動内容は異なる。早々という企業内定が出て終了、私の就職活動はそれだけではない。せつかく意識し始めた自分自身について、自分自身の将来について、アルバイトで垣間見た職業観について、自分のこれまでの人生について、自分のこれからの人生について、それらすべてのことを、立ち止まって、考えて、確認して、進んで、立ち止まる、そういった過程を含んだ活動にしたいと考えていた。

4月中旬、面接もひと段落し、次の選考に進むところ、落ちるところが出てきた。ただ、面接やエントリーシートで落ちた企業は、やはり興味があっただけで自分自身やりたいことではないと感じている。ただ、その興味がひとつの業界ではないところが、自分にとってはプラスだと感じる。さまざまな業界のことを調べ、また面接官、社員の方に実際話を聞くと、業界同士のつながりや関係性が見えてくるときがある。そういったことも踏まえ、就職活動は社会勉強ともいえる。その要素もあり、知らない企業でも、その企業の業

界での位置を事前に調べ、概念や仕事内容が自分の中で引っかかったなら足を運んで話しを聞くということが自分の中ですごくプラスのことであるように感じた。実際、社長自身がセミナーで話しをしたりする企業も多かった。私は、そういう人の話を聞くということが楽しくなっていた。話の中にキーワードがあるからだ。それは、時に就職活動全般の不安に対するメッセージであったり、また、自分自身が就職活動について考えていることの指針であったり、日ごろ就職活動以外のところで思考をめぐらせているようなことについての解決のヒントになるようなキーワードである。日常の自分の思考とそれとが繋がる部分があるのである。それを発見すると、自分にとってすごく意味のある話に思えてくる。もちろん、その企業に対するイメージも変わるが、それでその企業に入社したいと思えることもあれば、過去の自分の行動は正しかったのだと、自分自身を肯定できる瞬間にめぐりあえたりする。その出来事というか、言葉を、自分の日常の思考とリンクさせることによって気付かされるということが、私の就職活動を通じて一番の楽しみであったし、内定をとる以外の第二の目的であったように思える。実際に企業のトップが公演に来るセミナーが多く催されており、その人たちの厳しくも温かい言葉は、ただの企業宣伝、自伝だけにとどまることはなく、その人が困難に立ち向かっていったときの話影響を受けた人の話、社会人から学生に対するメッセージなどが盛り込まれており、大変聞き応えのあるものになっているのである。私は、興味のある職種の説明会に行き、そういう話を聞くことがとても楽しく思えた。まさしく眼からうるこであった。ただ、これが真の目的ではない。あくまで終着地点は納得の行く企業に内定をとることである。ただ、活動においては、私は結果も大切だが、過程も大切にしているということなのである。この話の場合、就職活動は自分自身の日常であるということをも自分の中に自覚させた出来事であった。話を聞いて、終わりというものだけでは物足りなすぎる。もちろんセミナーによって質に差はあり、淡々としていて納得の出来ないものも多かったが、なるべくプラスに感じられるよう、自分自身の思考と就職活動がリンクするようという思いから、私は、何かひとつでも得て帰るということを目指していた。得るものというのは、就職活動のヒントから、人生のヒントにいたるまでのものである。またそれは直接的な表現ではない。何か別の話をされているとき、その話題の解決策、考えが、そのとき考えていた疑問であったり、不安であったりを解決する鍵を見つけ、それを自分で解釈し、なんとなくでも解決の糸口にできた時期であった。日々充実とはこのことだと感じていた。また、これは就職活動以外のところでも感じられるようになった。地元の友人と居酒屋で飲んでいるときにも同じような

ことを感じていた。確かそのときはアルバイトの話をしていて、その中でも、真剣に自分の意見を言う場面になると、今まで整理されていなかったものが相手の意見も伴って自分の意見が明確になっていく。私は、こういう家庭の自己分析もあるのだと考えた。それまで、自己分析といえば、パソコンや履歴書やエントリーシートに向かい、自分の行動についてあれこれ考えるものであると考えていたが、セミナーで話を聞く中にも、友人との会話の中にも自己分析の要素は隠れていることを発見した。当たり前といえば当たり前かもしれないが、これは私にとって大きな発見であった。日常生活においても得るものが多くなったといえる。たとえば、一回アルバイトに入るだけでもこれまで以上にいろいろ考えるようになった。すると、セミナーなどの質問でも、自分の考えを少し絡めた質問が浮かぶようになっていった。

そのころから私は、自分の成長性を大切にするようにし始めた。それは、冷静に考えてみれば、社会に出ること自体今の自分よりは成長できる毎日が待っているだろう。それは、決して楽な道ではない。時に苦しい試練の連続であるかもしれない。しかし、成長性を望む私にとっては、退屈な毎日よりは、変化のある毎日を望む。若いうちの苦労は買ってでもしろとよく言われるが、これは、今苦勞して見えるものは、自分の糧となっていくという意味であるということ、今回私は身を持って感じる事ができた。そんな中、私は結果三社から内定をとることができた。この中から、一番私が望むライフスタイルで働くことのできる企業、誠実でしっかりした体系をとっている企業を選択した。もちろん返答の期限があったので、熟考した。選択期間中は苦悩したものの、今となって考えればまだ入社前ではあるが正しい選択だったと思える。成長性というと、ベンチャー企業というイメージがあるかもしれない。しかし、そうではない。要は自分次第なのである。自分の意識次第で成長度合いが大きく異なる。それは就職活動にも言えることで、面倒だと思ってやるか、何かひとつでも得て帰るという意識があるかどうかで大きく変わる。私は、これを初めて試みていたわけではなかった。アルバイトでその土台は作られていたのである。たかがアルバイトであるが、されどアルバイト。それは、目の前の与えられた仕事だけ行うという単調なものではなく、先輩の下で、その人を見ながら、後輩も見るといって、お客様の立場に立ちながら店側の立場も考えて物事を考える難しさ、そしていつの間にか全体的にフロアコントロールする立場にあったからこそ、そういった自分の意識次第で見える世界が変わるといったことに気づけたのだと思う。こうして、私の前途多難な就職活動は幕を閉じた。

4 章 これまでを振り返って・結論

前章で、生まれてから、今に至るまでの自分自身に少なからず影響を与えた主な出来事を上げた。これまでに自分自身の考えや内面に影響を与えたのは、やはり家族であることは明確である。自分自身の家族の中での位置、役割を意識した行動をする中で、私は自分のアイデンティティを築きあげてきたのだと今回改めて認識した。成長する中で家族の影響は大変大きいものであるし、自分に直接関係はないにせよ、家族の行動、考えは子供ながらよく見ているものであることが再確認された。自分以外の家族で家族の意思決定が行われているということから、私のこの少し受身の性格は、少なからず私の特殊な家族構成からくるものだということが解釈ができる。

エリクソンの論を参考にして考えると、遊戯期の「積極性と罪悪感」の項目で、私は、家族の中での自分の役割というか、ポジションを無意識的に考えることで積極性、自発性の部分があり見られなかったのではないかと考える。わがままを言えば迷惑になるという様なレベルではあるにせよ、私は少なからず迷惑にならないよう気を使っていた。それは、父親の存在と、母親の病気が大きいといえる。そういった一種の罪悪感を無意識的に抱えたまま成長していったのだろう。

次にあげられるのが学齢期の「勤勉性と劣等感」の項目における勤勉性という部分である。これは家族の影響ではなかったが、前項目での自発性が欠けていたために、勤勉の楽しさ、快樂というものをあまり感じずにいたのは事実である。自発的に習い事に行きたいと明示したわけでもなく、用意してくれたものに従うといったものであった。もちろんその中には楽しさの部分はあった。しかし、自分で決めて何かを始めるといったことはできないでいた。

青年期になり、エリクソンのいう今までの危機をもう一度整理する期間がやってきた。ここで、もう一度積極性と勤勉性という面から私を捉えてみる。先ほどにも記述したように、日常の細かい出来事の中でも、これらの積極性や自発性が出てくる機会があったことは言うまでもない。誰しもそうであろう。しかし、「人生」という大きいくくりで考えたときのそれらを明確に感じる事ができた出来事をあげて考えていく。

勤勉性という言葉から、勉強を連想すると、勉強自身に勤勉性を感じたのははっきり行って予備校に通い出す頃である。自発的に決め、自分の思うように一年やって結果を出す

という状況を楽しんでいたようにも思える。高校時代に勉強面でやり残したことを、この一年で自分なりにやるといったことから、このあたりから勤勉性がはっきりとしてきたように思える。ただ、自分自身が余り目標もない状態でいたなら、私はこの勤勉性を感じぬままに大学に入学していたのかもしれない。しかし、その後、アルバイトでも多くの勤勉性を感じることができた。接客業という仕事の中で、自分なりに納得のできる仕事をできたときの喜びなどはまさにそれである。納得のできる仕事とは、相手が満足し、自分も気分よくなれる状態のことを指す。要望に対し、うまく答える事ができたときの喜びもそうである。自分以外の誰かのために仕事をすることは結局、自分に返ってくる。つまりフィードバックされるものである。それを繰り返す中で自分自身が成長できる。そういう環境にこの4年間入れたことを私は自身に思っているし、間違いなく就職活動にも影響を及ぼしたものと捉えている。積極性も、路上ライブを始めた頃から身についたと実感できる。これまで与えられた道の上を歩いてきた自分にとって、とてもすがすがしい気分が望めたとし、罪悪感の抑制なしに自由にできる喜びを知り、夢中になれた事柄であった。「それまでの自分」を崩し、もう一度スタートさせたような気分である。これら2つの出来事は、この勤勉性と積極性を確立するに当たり、大きく影響を与えたといえる。

そして、就職活動を通じて初めて自分という人間に向き合う機会が与えられた。私は、単なる職業選択ではなく、この自分と向き合う機会を大切にしたいという捉え方をしていた。そちらのほうが比重は大きいものであった。それは活動中に自分のやりたいことを探す中での、まず自分を知るといふものを大切にしたいからである。そして、わかったことがある。一人で生きているわけじゃないということである。家族もそうだが、話を聞いてくれた友人の存在は大きい。友人からの返答で、もちろん勇気付けられたことはあった。それだけではなく、友人に自分がどういうことで悩んでいるのか、どういうことを普段考えているのかということが普段の会話の中からもうかがうことができるということである。つまり、話すことが自己分析につながるということだ。それにあたって、真剣に話を聞いてくれるような仲の友人がいるということは、私にとってはとてもありがたいことであった。もちろんそれは就職活動期に気づいたことでいままで何気にやってきたことであるが、気づいてからはなおいっそう、そういう時間を大切にしよう心がけた。自己分析は就職活動が終われば終わりというものでは決してないからである。それは時間が進むにつれて、環境が変わるにしたがって人は少なからず変わっていくものであるし、環境が変わったからこそ、依然いた環境のことを冷静に考えることができるのではなから

うか。話を戻すと、そういった人との関わりが本当に大切だと今回痛感した。人は一人で生きていない、ということはこういう関わりの中で自分が成長していくことなのだと感じた。尊敬できる人が回りに多くいる環境に恵まれて私は本当によかったと感じている。これは、初期成人期の親密性に関わるものと判断していいだろう。また、私は集団の中で埋没することなく、自分自身を保てるようになった。これまでは受け身である以上どうしても相手本位になることが多かった。しかし、自分の意見を持っているという自覚、またそれを持っているという自身から、面接などでも自分の意見を踏まえた言動が見られるようになってきた。これまでは、自分の長所・短所など、そこまで明確に考えたことがなかったことから、そのままの自分自身を受け入れることを大切にし、露呈した短所にどう向き合っていくかということ考えた。これは自分自身にとって進歩である。これを可能にしたのは就職活動であるし、活動自体の内容が、私が求めていた以上のものになっていったことが伺える。

今回、社会学自己論という形で、このように就職活動と今までの自分を棚卸し、それと向き合うことから始まる。私にとっては自分を知るには最適な機会だったといえる。今回それを踏まえて卒業論文という形でさらに深く掘り下げて自分自身を見つめなおせたということは、大学4年生のこの時期であることを踏まえ、今までの総決算の一部となったことはいうまでもない。

参考文献

E.H.エリクソン、『アイデンティティ：青年と危機』（＝岩瀬庸理訳，1973，金沢文庫）

一頁あたり（40×616行）

総頁数 21 頁（本文）